

序

本書は、《千字文》をもとにした、漢字と字義から古代の漢字音である漢語中古音を調べ、知るための工具である（豫定）。

《千字文》は、中國六朝時代蕭梁のとき、周興嗣が作った長詩である。口で唱へれば四言 250 句の詩であり、筆で記せば千字の書となる《千字文》は、森羅萬象を詠った韻文であるだけでなく、文字についてもこれを同じくするところがない。これによって、この詩は中國を中心とする漢字文化圏において、漢字を学ぶ教本として、また書道を習ふ手本として、廣く使はれることとなった。

またこの長詩は、六朝後期に編まれたものであることから、その音韻は當時の漢語音である中古音をよく反映したものとなつてゐる。これとその“パングラム”としての役割からか、近頃わたしの周りには中古音で《千字文》を誦誦しようと試みる不思議な者たちが幾人か存在してゐる。筆で記す漢字を憶えるのに使はれてきた《千字文》が、いま逆に口で唱へる中古音を憶えるのに使はれることは、とても面白みが深い次第である。

中古音を知るとは、古代漢語や漢語音韻學の學習に、そのほかの歴史的分野に寄與するのみならず、また韻律を重んじて漢詩を詠むためにも役立つ。しかしながら按ずるに、いま日本で中古音を手輕に調べることのできる“辭書”は、なかなかこれといったものが無い。あつたとしても、中古音の一部の情報しか載せてゐないものや、再構音しかないもの、専門的すぎて使ひづらいもの、字音義を掲出してゐないもの……などなどである。

漢語において漢字の破讀は常に考慮すべきもので、よつて字音の情報だけがあつても對應する字音義が分からなければ、實用上はあまり役に立たない。しかし字音の情報が完全でなければ、その正確な姿を知ることもしかない。本書は、この2點に注意しつつ、しかし簡單のために“字音を知る”ときに不要な情報を削ぎ落とし、もつて手早く中古音を引けることを目指したものである。

なほ“音義”は響きがかつこよくてそれっぽいから使っただけなので、“音義書じゃないよこれ!”と思つても氣にしないほしい。ごめん。さういふのは巖波文庫本《千字文》とかを讀んでください。

注意 1

本書は古代漢語をあつかうという性質上、どうしても現行の日本の漢字（所謂「新字体」）が不都合な場合が想定される。そのため、全編に渡って所謂「旧字体」を使用する。また、所謂「旧字体」に現代仮名遣いを組み合わせるのはなんかキモいので、これも歴史的仮名遣いとする。

これにより、現代日本語表記にのみ慣れた人にとっては大変に読みにくい文章になってしまっていることは否めない。まあこの分野に触れるならこれくらい読めたほうがいいので頑張りました。漢字好きならスラスラ読める。

なお、所謂「旧字体」を使用するのはあくまでも「所謂『新字体』が不都合だから」であって、所謂「旧字体」が都合がいいからではない。そもそも所謂「旧字体」が成立したのは、本書であつかう漢語の時代から見ればずっと後のことなので、当時に所謂「旧字体」が使われていたからでもない。ただ単に、漢字全般にわたる総合的な体系として、現代にコンピュータ上で扱えるものとしては所謂「新字体」よりマシなだけである。ちなみに私個人は所謂「旧字体」がそんなに好きではない。というか漢字を廃止しよう。

注意 2

1: 少なくとも本書においては、“漢語”と“中國語”を全然おなじ言葉とする。現代日本語で使はれる古典漢語由來詞としての“漢語”は、これを“漢來詞”とする。また、この“漢語”は、時代、地域を問はない全般の漢語を指す。現代の所謂“中國語”を指すときは、必ず“現代（標準）漢語”などとして區別する。

2: 言語（フランス語：langage）と言葉（フランス語：mot）を混同しないやうにするため、前者を“語”と、後者を“詞”として表す。

3: さまざまな用語が現代漢語で使はれるものとなってゐるが、忘れてゐなければ相當する現代日本語で一般的なものを補足する。

餘談だが、現代日本語でいふ“漢語”や、日本語漢字音體系の一種である“漢音”，またそもそも“漢字”などの{漢}は、漢朝や漢代のことではなく中國（フランス語：Chine）のことである。漢朝から傳はったわけでも漢代に出來たわけでもないので注意されたい。

目次

| | |
|----------------|----|
| 序····· | 3 |
| 凡例····· | 6 |
| 辭書本文····· | 13 |
| 附錄：中古音の概説····· | 48 |
| 附錄：韻母表····· | 61 |
| 附錄：聲母表····· | 64 |
| 四角號碼索引····· | 65 |
| 參考文獻····· | 69 |

凡例

使用する括弧について

本書では以下の括弧類を用ゐる。なほ、○は“なんらかの文字など”を示す。

“○”：普通引用符として用ゐる。現代日本語文で一般的な「○」については、個人的に右下に終はり括弧が来るのが果てしなく嫌なため、これを用ゐない。

《○》/《○》：書名を示す。都合により《○》を使用しない場合は、二重下線をもってその代用となす。InDesign で波線がうまくできなかった。

〈○〉/〈○〉：字種を示す。複数字が入る場合は文章言語における記法を示す。

〔○〕：字體を示す。例として，“國”と“国”は異體字関係にあるもののため、〈國〉＝〈国〉であり〔國〕≠〔国〕である。

/○/: 音韻を示す。中古音に對しては隋拼を用ゐた表記でこれにあたるが、特別の事情がない限りは（ラテン文字であるだけで區別できるため）括弧を省略する。

[○]: 音聲を示す。表記は所謂 IPA を用ゐる。なんだそれ？ググれば分かるホトトギス。正直これくらゐは Wikipedia でいい。

{○}: 詞を示す。漢詞の場合、自明なものを除いて漢字表記とともにその中古詞音を〈〉で並べて示す。たとへ漢字表記が異なつてゐても、字音と意義が全然おなじならば同じ詞であること；逆にたとへ漢字表記が同じでも、字音または意義が全然ことなるならば異なる詞であることに注意。

【○】：意義（意味）を示す。本書は現代日本語で書かれてゐるため、意義は現代日本語に翻譯されたものとなつてゐる。

本文各欄について

富强民主

……①八字みだし欄

文明和諧

某^{XXX:Y}
ZZZZ_z

……②親字欄

① foo 調韻聲 韵 bar ホゲ

……③字音欄

動詞【びよびよする】，びよほげ。

名詞，ふが。

……④字音義欄

{大人 |Otona}：名詞。

{大分 |Daibu}：副詞【かなり】。

……⑤複音詞欄

{大分 |Ôita}：名詞，地名。

①八字みだし欄：《千字文》の2句を對にした八字みだし。

富强民主
文明和諧

字體字形の問題をなるべく避けるため，中國の繁體字を用ゐた。

②親字欄：漢字の情報を載せる。

某^{XXX:Y}
ZZZZ_z

“某”部分：親字。

漢字が2字以上ならんでゐる場合は，2字目以降が異體字。どの異體字を載せ

るかについては、本書は字書ではないので恣意によったが、《常用漢字表》に所謂“舊字體”とともに載せられてゐるところの所謂“新字體”は必ず載せることとした。

“XXX:Y”部分：《千字文》での位置を示す番號。

XXX が《千字文》の各句の番號であり、001 から 250 まで存在する。Y が句内での番號で、四言句なので 1 から 4 まで。ただし、本體驗版では 001:1 から 064:4 までのみ收録。

諸本での異同などによって複数の漢字みだしが同一の位置に相當する場合、後ろに a, b, ……を附してこれを示した。中には異體字關係にあるともいへるものもあるが、これについても恣意によった。

“ZZZZ_z”部分：四角號碼。常識の 1 つ。

四角號碼は辭書によって異なることがあってとても酷いので、知りうる限りの候補を / で區切って載せた。複數字のみだしの場合、それぞれに對應する號碼を // で區切った。

餘談だが例とした〈某〉といふ字そのものは、《千字文》において第 169 句が“孟軻敦素”とあるところを、聖人（孟軻）の諱を避けるために“孟某敦素”とすることがあるため、そこに出てくる（169:2b）。

③字音欄：中古音の情報を載せる。

● foo 調韻聲 𪛗 bar ホゲ

“●”部分：平仄を示す。○が平聲；●が仄聲。

“foo”部分：中古音の隋拼表記。

“調韻聲”部分：中古音の傳統的表記。

聲調、韻母、聲母。介音の情報が必要な韻母は、それを下つきにして記した。

“𪛗”部分：詩韻（平水韻）。

四聲は省略した。というか InDesign でのうまいやりかたがわからなかった。

“bar” 部分：中古音から導出される現代標準漢語漢字音（所謂“北京語”音）。

あくまで規則的な導出のため、実際の漢字音とは必ずしも一致しない。一部の字音については、聲調の導出が規則的には不可能なため、それについては無標記とした。また、原則として文讀音を採った。

“ホゲ” 部分：中古音から導出される日本語漢字音（漢音）。

あくまで規則的な導出のため、実際の漢字音とは必ずしも一致しない。

“ホゲ” 部分の後ろにㄹまたはㄹ의印がある場合、ㄹはその字音が他と比して極一般的であるため、ㄹはその字音が一部の複音詞にしか使はれないため、字音義を省略したことを示す。それらの場合、ㄹは他の字音義に該当しないことを確認して、ㄹは複音節詞を確認して字音を判断する。なほㄹは単音字にも使ふ。

④字音義欄：各字音に對應する意義を載せる。

動詞【ぴよぴよする】、ぴよほげ。
名詞、ふが。

意義には必ず詞類（品詞）を示した。詞類によって字音が異なる場合があるためである。“同じ詞類”でもさらに分類が可能なものもあるが（たとへば形容詞の“性質形容詞”、“状態形容詞”、“純粹形容詞”など）、そこまでは無用なのでそれらを分けてはゐない。

“意義そのもの（の現代日本語譯）”を記す際にはこれを括弧類の説明にある通り【○】でかこみ、對して“意義の（現代日本語での）説明”はこれをそのまま記すことで、これらを區別するやうに努めた。でもたまに混同してゐるかもしれない。また、追加の説明を加へる際には〈〉で區切った。

特に意味はないが、“意義そのもの”については可能な限り漢來詞を避けた。また、訓讀みは悪い文明なので、日本語本來詞を漢字で書くことも可能な限り避けた。

⑤複音詞欄：注意すべき複音詞（複音節の詞）を載せる。

{大人 |Otona}：名詞。

{大分 |Daibu}：副詞【かなり】。

{大分 |Ôita}：名詞，地名。

ここには《辭源》に記載のある複音詞で、一般的な字音でない音を使ふ詞を載せる。字音欄で㊦を附せられた字音についても、ここにそれを用ゐる複音詞を載せることでその字音の説明とする。ただし、基本的に“注意”を促すものとしての掲出に留めるために、詞義の説明については詞類のみを記す。

複音詞のなかには、字音によって意味が（意味によって字音が）ことなるもの、つまり詞が異なるものもあり、これについても《辭源》に記載のあるものは載せた。こちらについてはそれら異なる詞を區別するために詞義の説明を附した。同一の詞音に複数の詞義がある場合、それらを〈;〉で區切って並べた。また、同じ詞類が續く場合は、2つめ以降のものを略記した。

隋拼表記は、先頭字の大文字小文字をもって名詞等とそれ以外を區別するが、詞義に名詞等とそれ以外の雙方がある場合は無標として小文字に統一した。また、固有名詞の下線についても、同様の場合は無標として下線なしに統一した。

《千字文》 梁敕員外散騎侍郎周興嗣次韵

«Chendziê Myun» Lian thriæk Xryennuâi Sângriêdiêlan Tyu Qhiênziê chîxrîn

- | | | |
|---------|-----------------------------|---|
| 001-002 | 天地玄黃，宇宙洪荒。 | Thend'î xuenxuan, Xyódryû xunqhuan. |
| 003-004 | 日月盈昃，晨宿列張。 | Nitnyot jiencriæk, Dinsyû liettrian. |
| 005-006 | 寒來暑往，秋收冬藏。 | Xan lâi Shió xyán, Chyu shyu Ton dzan. |
| 007-008 | 閏餘成歲，律呂調陽。 | Nýnjio dien Syêi, Lytlió deu Jian. |
| 009-010 | 雲騰致雨，露結爲霜。 | Xyun dæŋ trî Xyó, Lô ket xrye Srian. |
| 011-012 | 金生麗水，玉出昆岡。 | Krim srien <u>Lêishyî</u> , Nyok thyt <u>Kunkan</u> . |
| 013-014 | 劍號巨闕，珠稱夜光。 | Kiâm xâu <u>Giókyot</u> , Tyo thiæŋ <u>Jiâkuan</u> . |
| 015-016 | 果珍李柰，菜重芥薑。 | Kuá trin Liá-Nâi, Châi dryôn Krêi-Kian. |
| 017-018 | 海鹹河淡，鱗潛羽翔。 | Qhái xrem Xa dâm, Lin dziem Xyó zian. |
| 019-020 | <u>龍師火帝</u> ， <u>鳥官人皇</u> 。 | <u>Lyonsri Qhuátêi</u> , <u>Téukuan Ninxuan</u> . |
| 021-022 | 始制文字，乃服衣裳。 | shió tiêi Myundziê, nái byuk Qièidian. |
| 023-024 | 推位讓國， <u>有虞陶唐</u> 。 | thui Xryî niân Kuæk, <u>Xyúnyo Daudan</u> . |
| 025-026 | 吊民伐罪， <u>周發殷湯</u> 。 | têu Min byot Dzúi, <u>Tyu Pyot Qiæn Than</u> . |
| 027-028 | 坐朝問道，垂拱平章。 | dzuá Drieu myûn Dáu, dyekyón briengtian. |
| 029-030 | 愛育黎首，臣伏戎羌。 | qêijyuk Leishyú, dinbyuk Nyunghian. |
| 031-032 | 遐邇一體，率賓歸王。 | Xranié qit Théi, Srytpin kyui Xyan. |
| 033-034 | 鳴鳳在樹，白駒食場。 | Mrienbyûŋ dzói Dyô, Brakkyo zhiæk Drian. |
| 035-036 | 化被草木，賴及萬方。 | Qhruá brié Cháumuk, Lâi grip Myônpyan. |
| 037-038 | 蓋此身髮，四大五常。 | kâi Chié Shinpyot, Sídâi Ŋóidian. |
| 039-040 | 恭惟鞠養，豈敢毀傷。 | kyonjyi Kyukjián, khiáikám qhryéshian. |
| 041-042 | 女慕貞潔，男效才良。 | Nrió mô Trienliet, Næm xrâu Dzæilian. |
| 043-044 | 知過必改，得能莫忘。 | trie Kuâ pit kái, tæk Næŋ mak myan. |

045-046 周談彼短，靡恃己長。 myán dam Prié Tuán, mrié dió Kió Driən.

047-048 信使可覆，器欲難量。 Sîn sriá khá phyuk, Khrî tyok nan lian.

049-050 墨悲絲染，詩贊羔羊。 Mək pryî Sià niém, Shià cân Kaujian.

～～ここて換韻～～

051-052 景行維賢，剋念作聖。 Kriēn xrân jyî Xen, Khəknēm cak Shiēn.

053-054 德建名立，形端表正。 Tək kiân Miēn lip, Xeŋ tuan Priêu tiēn.

055-056 空谷傳聲，虛堂習聽。 Khuŋkuk dryen Shiēn, Qhiodaŋ zip Thēn.

057-058 禍因惡積，福緣善慶。 Xuá qin Qakciek, Pyuk jyēn Diénkhriēn.

059-060 尺璧非寶，寸陰是競。 Thiekiek pyui páu, Chûnqrim dié griēn.

061-062 資父事君，曰嚴與敬。 ci Byó dzriâ Kyun, xyot Ŋiam jió Kriēn.

063-064 孝當竭力，忠則盡命。 Qhrâu taŋ giat Liək, Tryuŋ cək dzín Mriēn.

～～體驗版はここまで～～

065-066 臨深履薄，夙興溫清。 lim Shim lí Bak, syuk qhiəŋ qunchiēn.

067-068 似蘭斯馨，如松之盛。 zió Lan sie qheŋ, nio Zyōŋ tiā diēn.

069-070 川流不息，淵澄取映。 Thyen lyu pyú siək, Quen driəŋ chyó Qriēn.

071-072 容止若思，言辭安定。 Jyōŋtiá niak siə, Ŋianziə qandēn.

073-074 篤初誠美，慎終宜令。 Tok chrío diēn mryí, đin tyuŋ ɣrie liēn.

075-076 榮業所基，藉甚無竟。 Xryeŋŋiap srió kiə, Dziekdím myo kriēn.

077-078 學優登仕，攝職從政。 Xrok qyu tən dzriá, shiep Tiək dzyōŋ Tiēn.

079-080 存以甘棠，去而益詠。 dzun jiá Kamdaŋ, khiô niə qiek xryēn.

⋮
⋮
⋮

天地玄黄

宇宙洪荒

天^{001:1}
1043₀/1080₄

○ then 平先_開透 𠀤 tiān テヌ ③

地^{001:2}
4411₂

● d'ĩ 去脂_開定 𠀤 dì チ ③

玄^{001:3a}
0073₂

○ xuen 平先_合匣 𠀤 xuán クエヌ ③

● xuên 去先_合匣 𠀤 xuàn クエヌ

動詞【まどはせる】，通〈眩〉。

動詞【めがくらむ】，通〈炫〉。

元^{001:3b}
1021₁

○ nyon 平元_合疑 𠀤 yuán グエヌ ③

黄黄^{001:4}
4480₆//4480₆

○ xuan 平唐_合匣 陽 huáng クワウ ③

● xuan 去唐_合匣 陽 huáng クワウ

動詞【紙を（きいろく）そめる】，通
〈潢〉。

宇^{002:1}
3040₁

● xyó 上虞云 𠀤 yǔ ウ ③

宙^{002:2}
3060₂/3060₅

● dryû 去尤澄 𠀤 zhòu チウ ③

洪^{002:3}
3418₁

○ xun 平東_匣 𠀤 hóng コウ ③

荒^{002:4}
4421₁/4421₂

○ qhuan 平唐_合曉 陽 huāng クワウ ③

● qhuán 上唐_合曉 陽 huǎng クワウ ③

{荒忽 | qhuángqhut} = {恍惚}: 形容詞。

日月盈昃

晨宿列張

日^{003:1}
6010₀

● nit 入真_開日 𠀤 rì ジツ ③

月^{003:2}
7722₀

● nyot 入元_合疑 𠀤 yuè グエツ ③

盈^{003:3}
1710₇/1710₂

○ jien 平清_開以 𠀤 yíng エイ ③

昃^{003:4}
6028₁

● criæk 入蒸_開莊 𠀤 zhe ショク ③

附録：中古音の概説

1.1 中古漢語について

中古漢語（中古中國語）は、古代漢語の一種である。漢語の時代区分は學者や分野（音韻、文法、詞彙など）によって多少なりとも異なっているのだが、ここでそれを総合して考慮すれば、中古漢語の使はれた時代は廣くとれば東漢（後漢）代から北宋代あたりまで、狭くとれば南北朝時代から唐代までとなる。おおよそそのあたりを基準にして、それより前が上古漢語、それより後が近代漢語と考へれば、感覺としてはそれほど間違ふことはない。

ところで“古代漢語”といふ言葉を特に上古漢語を指すものとして使っていることもあったりするが、少なくとも音韻の分野ではその言ひかたをほとんどしない。はず。

1.2 中古音について

音韻分野から見たときに、中古漢語の最大の特徴とも言へるものが、“漢字の読みかた”を調べるうへで肝心となる、その音韻資料の豊富さである。

漢代より興った漢字の読み、つまり漢語の音韻に関する研究は、隋代の公元600年ごろに作られた《切韻》といふ音韻辭書（韻書）へと至る。この《切韻》によって記録された中古漢語漢字音を“中古音”と、または唐代中後期以降の後期中古音と分けて“前期中古音”と言ふ（ここでは單に“中古音”とする）。

時をほぼ同じくして、沈約などによって六朝以來さかんになった漢詩韻律研究は、紆余曲折を経て押韻と平仄を特徴とする“近體詩”の成立に結實した。この韻律の基幹は中古音にあり、當時の人は《切韻》やそれを繼承した各種の“切韻系韻書”を利用して詩を作った。つまり、近體詩は中古音を前提とした詩とも言へるのである。いまでも漢詩と言へば普通は近體詩を指すので、その影響力は大きい。

《切韻》と中古音は、そのころより始まった科擧に漢詩が出題されたことなどにより重要な地位を占めた。ただ、《切韻》は後代さまざまな人によって手が加へられていき、またそれらは次々に失はれていった。

現存する切韻系韻書の1つとしては、北宋代の公元1000年ごろに作られた《大宋重修廣韻》、略して《廣韻》がある。長く、《廣韻》が最も古くて完全な切韻系韻

書だったため、これが近代的な漢語音韻學において重要な資料となった。そのため、漢語音韻學の用語（韻母の名稱など）は《切韻》原本ではなく《廣韻》が元になってゐる。なほ、今はもっと古い韻書もある。

ところで中古音はまた、現代漢語諸方言ほぼすべての源流ともなつてゐる。くはへて、短命に終はつた隋を引きついで唐は、周邊地域に大きな影響を與へ、ここに“漢字文化圏”が形成されていったが、韓國、越南、そして日本などの中國域外諸方は、中國からもたらされた漢字を読むとき、當時の漢字音である中古音を引き繼いだ。これによって、漢字文化圏のほぼすべて漢字音の源流が中古音にあるのである。これにより、いまでも漢字音をしっかりと考へる際には、中古音を避けて通ることはできない。

そのうへ、中古音より前の時代の漢字音である“上古音”を考える際にも、中古音の知識が要求される。上古音は漢字が體系として成立した時期の漢字音といふことで、漢字の起源を求めるときに非常に重要なのだが、いかんせん上古音は資料がとても限られている。そのため、中古音を基礎とし、その前を考へるといふ工程が必要なのである。

1.3 中古音の學問分野

現在の中古音の研究は、主に2つに大別できる研究體系によって擔保されてゐる。1つは傳統的な漢語音韻學の研究、もう1つはヨーロッパから傳來した西洋言語學の音韻論や歴史言語學の研究である。この2つが合はさることによって現代の“漢語音韻學”が成立してゐるわけだが、これはつまりその2つを把握することが中古音を知るうへで重要な基礎となるといふことでもある。それぞれの違った概念を把握し、用語を憶えていかなければ、漢語音韻學の入り口に立つことすら危ふい。特に、傳統的な漢語音韻學は、その概念も用語も他分野やほかの言語の學習、研究に通用するところがほとんどない。このことが本分野の“難解さ”に拍車をかけてゐるといへるだらう。

とはいへ實際のところ、漢語音韻學は入門が難しいだけであつて、それ自體はそこまで難解なものではない（はず）。また、もう一方の柱である西洋言語學については、世界中で學ばれ、ほとんど全ての言語に通用するものであるだけに、傳統的漢語音韻學よりも遙かに入り口が開いてゐる。よつて、漢語音韻學を學習するには、日本語であれフランス語であれタミル語であれ、西洋言語學によって記述された他の言語の音韻論などを修めておくと、多少なりともマシになるだらう。きっと。

1.4 中古音の再構

中古音の在りし日の姿を探求する再構は、(比較言語学の常道だが) 1つは《廣韻》や外國語の音譯書といった昔の資料を紐解くことで、またもう1つは起こったであらう變化を現代の諸漢語方言から遡ることで成立してゐる(非漢語である日本語などの漢字音も、“漢字音”に限定した場合には漢語方言の一種とみなせる。これを“(漢語)域外方言”と言ったりする)。

ただ、それで現實の、實際に話されていたであらう中古音が再構されるかと言へば、さうではない。そもそも《切韻》は、その編纂の過程で長安や健康などのどこか1つの方言を基準においたのではなく、各地の語音を考慮したことが序に記されてゐる。といふことは、《切韻》を過不足なく全く表せる體系(これを“切韻音系”と言ふ)は、逆に少なくとも《切韻》編纂時には現實に存在しなかった可能性が十分にある。切韻音系を再構したところで、それは中古音の理想的な“架空の”體系でしかない、かもしれないといふことである。

しかしながら、その再構に意味がないわけでもない。1つに、各方言を折衷したといふことは、ある意味で圖らずも一種の比較再構をおこなったとも言へるので、その體系は各方言の大本の、《切韻》以前の(特に六朝期の)漢語と親和性が高い。そのときのものではないからと言って、全くの架空とも言ひきれない。

2つに、そもそも漢語は地域によっても時代によっても違つてゐるものなので、諸地域諸時代に通用する理想的な體系を把握できるのは重要である。“某時代の某地域の音は、《切韻》のこの音がかうなつてゐる。”と考へればよく、それができるのは切韻音系をつかんでこそである。また、當時の文化人も(時代的な差異はともかく)地域的な差異は自覺してゐて、だからこそ切韻系韻書を利用したのだから、切韻音系が音韻の基準として作用したことは否めない。ある時代のある地域でしか使はれてゐないだらう實際の音が、果たして切韻音系より優先されるべきかは、まあ状況次第といったところだらう。

もっとも、結局のところ理想的とはいへ(おそらく)架空は架空なので、中古音が具體的にどう發音されてゐたかについては、あまり深く考へてもしかたのないことも多い。大切なのは、中古音がどういふ體系を持っていたかといふことと、その要素がおよそどんな感じの音であったかを、ふんわりと知っておくことである。

1.5 隋拼について

本書では、独自の概念がやたら多くて分かりにくい漢語音韻学の伝統的な用語を少しでも避けるためもあり、それらのかはりに“隋拼”を多く用ゐて中古音を記述する。

隋拼（一往，“隋語拼音”の略）は私が作った中古音の表記法である。一般的にはアルファベットと呼ばれるラテン文字を使って中古音を表す。

使ふ字母は、大文字小文字を同一にして：

a b c d e æ g h i j k l m n ŋ o p q r s t u x y z

の 25 字母、もしくは單獨で使はれない <h> を、また <dz> を合字にして考へて：

a b c c h d d z e æ g i j k k h l m n ŋ o p p h q q h r s s h t t h u x y z z h

の 32 個である（辭書順はこっち）。

これに a e æ i o u y のうへに來る聲調記號としてエグュ <◌̊> とシルコンフレクス <◌̋>、また例外音の記述に <◌̌> を、聲母の整理用特殊字母として を用ゐる。

中古音の表記法には他にもいろいろとあるのだが、隋拼は特に読みやすさ、わかりやすさ、體系性を重視して設計した（つもり）。特に、ある 2 つの音がどういふ關係性にあるのかといふことはかなり分かりやすくなってゐる（はず）。

原資料はもちろん伝統的な用語を使って記述してあるものであるが、これを隋拼に直して表すことで、より直感的に読みやすく分かりやすくすることを目的とする。

ただし、隋拼はあくまでも中古音の體系の表記法であつて、中古音の發音の表記法、特に再構音ではないということに注意されたい。隋拼表記された音は、隋拼でそのやうに書ける何らかの音といふことでしかなく、實際にどのやうに發音されたものかを問題にしない。もっとも、具體はともかく抽象的な體系としてはきちんと記述されるので、“そのまま” 讀んでもあまり問題はない。これは、先に述べた中古音の“理想的な架空”といふ性質に沿ふものである。

2 中古音の基礎

2.1 漢字音といふ概念

1 つの漢字には、原則として 1 音節の音が割り當てられてゐる。これを“漢字音”といふ。なほ、日本語でおなじみの“訓讀み”は中古漢語には（たぶん）存在

せず、そもそも詞素文字（表語文字）としての漢字の本質とはあまり関係ないので言及しない。訓読み滅びろ。

漢字があってそれを讀むといふ流れにおいては、漢字音は眞に“漢字の讀みかた”である。もっとも、およそ文字といふものは、本質的には“詞（ことば）”を書いたものである。詞は意味を持つ言語の單位の1つであるが、これを聴覺的に表すものが音で、視覺的に表すものが文字である。基本的に、詞を表すものとして音は文字より先に成立する。そのため、むしろ漢字が“漢字音の書きかた”であると理解したほうが本質に近い。

とはいへ、文字は音より遙かに保存性に優れてゐて、時間的にも空間的にも通用性が高い。言語といふものはその音韻であれ文法であれ、時代を経ることで變化していくもので、またその變化が地域ごとに異なることで所謂“方言”が生まれていくものである。文字もまたその例に漏れることはないのだが、音と比較すれば壓倒的な保守性を持つ。それは特に漢字においては強固なもので、よって“漢字音は漢字の讀みかた”と考へるほうが分かりやすくなってゐるのである。それゆゑ、ここでは“實際は逆だ”といふことを頭の片隅に置いてもらふだけで構はない。

2.2 漢語音韻學における音節

西洋言語學においては、音節の構成要素を“子音 (C)”と“母音 (V)”に大別する。音節は母音（ないしその機能を果たす一部の子音）を中核とする音の單位で、そこにCがあるかないか、後ろにあるかないかによって、主にV、CV、VC、CVCの4種類が存在する、と考へる。言語によってはここに“聲調”が加はるが、これは音節全體にかぶさるやうにして存在するため、CやVなどと時間的な前後は無い。

一方、漢語音韻學においては、傳統的に音節の構成要素を、音節の最初の子音である頭子音を“聲母”とし、また音節の残りの部分を“韻母”として大別する。聲調は、韻母に含んで言っているときと含まないで言っているときがあってややこしいが、とりあへずここでは含まないことにする。よって、1つの音節は1つの聲母、1つの韻母、そして1つの聲調から成る。

なほ、漢語音韻學ではこれらの要素が“無い”といふことは“無いといふことがある”と考へる。そのため、西洋言語學と違って“聲母がない”といふことにはならず聲母も韻母も聲調も常になにがしかが存在する。この概念を現代では“ゼロ

（零）”と言ふことが多く、たとへばゼロの聲母を“ゼロ聲母”などと呼ぶ（ゼロの表記としては〈〇〉が使はれる）。

この独自の概念は、他の言語はともかく漢語にとってはいろいろと嬉しいのだが、その理由は割愛する。さういふものだと思っておけばよい。

以下、中古音の聲調、韻母、聲母を簡単に説明する。ちなみにこの順番なのは説明がしやすかったからで特に深い意味はない。

2.3.1 中古音の聲調

中古音には4種類の聲調が存在する。それぞれ平聲、上聲、去聲、入聲と呼ばれ、また合はせて四聲と稱される。一往、それぞれ / ヒョーショー /、/ ジョーショー /、/ キョショー /、/ ニッショー / といふことが多いが、漢語音韻學用語は日本語で讀むと意味不明になるのも多いので、別に讀みかたなぞ気にしないでよい。なほ、中古音に（少なくとも記録上）ゼロ聲調は存在しない。連續變調もない。

隋拼の記法としては、四聲は母音字の上に置く聲調記號によって表される。平聲は無標（〈◌〉、例：東 |tun）；上聲はエギュ（〈◌̊〉、例：可 |khá）；去聲はシルコンフレクス（〈◌̋〉、例：漢 |qhân）；入聲は平聲と同じ無標だが、後述の理由により音節の最後が -p, -t, -k で終はることによって示される（例：日 |nit）。1つの音節に母音字が複数あるとき、エギュとシルコンフレクスが具体的にどの母音字の上につくかについては、韻母（再）の項で説明する。

四聲のうち少なくとも平聲、上聲、去聲については、發音の高い低いをもって辨別される“真正の聲調”であるとされることが多い。實際の調値、つまり音の高さや上げ下げについてはほとんどよく分かってゐないが、9世紀末に書かれた日本の安然《悉曇藏》の記述から推定すると、唐代の長安音は次のやうになってゐる。

- ・ 平聲 ◌：低い調子（現代漢語の第3聲と似た調子、ただし上がらない）
- ・ 上聲 ◌̊：高い調子（現代漢語の第1聲と似た調子）
- ・ 去聲 ◌̋：上がる調子（現代漢語の第2聲と似た調子）

ただし、これはあくまで唐代（しかも後期）（の日本）の記録によるもので、隋代6世紀末の《切韻》や他の時代にそのまま當てはまるとは限らない。また、假にさうであってもなくても、長安音の調子が他の地域でも同じやうなものだったとも言へない。

しかしながら、他にこれ以前の具体的な資料があるわけでもないで、とりあへずこの調子を目安にしておいてもさして問題はないだらう。結局のところ、實際を承知しつつ、しかしそれでは何も言へなくなってしまうので、實用では細かいことを気にしない、といふのがこの世界では重要なのだ。

入聲については、（少なくとも中古音については）音節の最後の子音、つまり末子音が非鼻音の閉鎖音である -p, -t, -k で終はってゐて、また逆に音節末子音が -p, -t, -k で終はってゐるものは入聲となつてゐる。つまり、入聲と他の三聲は音節末子音によって區別される（ただし、音の高低が關はつてゐたかどうかは不明。とりあへずここでは、音の高さに關はらず -p, -t, -k で終はつてゐれば入聲とする）。

平上去聲は純粹に音の高低によって區別され、それ以外の音韻的な違いはない。また、平上去聲とは性質が違ふとはいへ、入聲の -p, -t, -k は平上去聲の -m, -n, -ŋ に音韻的な對應がある。そのため、たとえば *sím* に對應する入聲は *sip* であるとか、*lat* に對應する上聲は *lán* である、などと言ふことができる。これを“四聲相配”と言ひ、よつて對應する四聲の組に對してその 1 つをもつて代表して表すことができるのである（通常は平聲で代表される）。

四聲相配における入聲を、平上去聲の -m, -n, -ŋ 以外の場合にも對應させることもあつたりする。ただ、簡單のためここでは考慮しないものとする。

なほ、漢詩における“平仄”とは、四聲を平聲と上去入聲の 2 つにわけ、前者をそのまま平聲、後者を合はせて仄聲としたものである。なぜその分けかたをして韻律が組まれてゐるのかについては、おそらく音の高低か長短になんらかの意味があつたのだと思はれるが、詳しいことは不明である。

2.3.2.1 中古音の韻母

中古音には 105 種類の韻母が存在する。といっても、これは四聲相配によって聲調を取り除いたもので、それを含んだ場合はもっと多くなる（四聲によって無い韻母もあるので單純に 4 倍あるといふわけではない）。

韻母はさらに介音、主母音、韻尾の 3 つに分かれるので、そこから記述する。

2.3.2.2 中古音の介音

介音とは、韻母の先頭にある要素である。あまり使はれないのだが、韻頭とも呼ばれる。

これは西洋言語學的に言へば、上昇二重母音か三重母音の最初にくる（半）母音である。なんのこっちゃといった感じだが、現代日本語で言へば訓令式ローマ字の ⟨y⟩、つまり / キャ /、/ シュ /、/ チョ / などにある拗音がこれに該当する。

中古音にある介音は、隋拼表記で -i-, -u-, -y-, -r-, -ri-, -ru-, -ry-, そしてゼロの 8 つである。

- ・ -i-: [i] や [j] といった、現代日本語で言へばヤ行の介音。
- ・ -u-: [u] や [w] といった、現代日本語で言へばワ行に近い介音。
- ・ -y-: -i- と -u- が合はさったもの。現代で発音する分には別に [y] や [ɥ] で良いと思ふ。現代日本語で言へば / ユ / に近い、現代漢語やドイツ語なんかにあるアレ。
- ・ ゼロ: -i- も -u- も無いもの。西洋言語學的には半母音ではない、といふかそこになにも無い。漢語音韻學でも“介音がない”と言はれたりするが、それはゼロ介音といふことなのであまり気にしないでいい。
- ・ rが入ってるやつ: rは特殊な介音。これは上古音に由來する表記上のもので、中古音（少なくとも切韻音系）では讀立した音聲上の介音要素ではなく、母音の違いとして現れてゐたとする人や、いや何らかの“r的な”半母音、接近音だったとする人もゐる。まあ正直なところ中古音を面倒にしてゐる最大の要因の1つなので、母音の数が増えるよりは、ひとまづ介音でとってしまったほうがまだ楽じゃないだらうか。わたしはもう [ɹ] で発音しちゃふよ。母音の違いひとする場合、-ru- は單に -r- のついた -u- (rはそのあとの母音を左右する) だが、-ri- と -ry- はそれぞれ [i] と [y] あたりになる。

この8つの介音は -i- と -u- と -r- といふ3つの“介音要素”のあるなしと見ることができる。たとへば介音 -i-, -y-, -ri-, -ry- は介音要素 -i- があるといふ意味でセットになってゐる。

なほ、傳統的に介音要素 -i- のある韻母を“三等韻”，-u- のあるものを“合口韻”と言ふ。それぞれ對立する概念に“一 / 二 / 四等韻”，“開口韻”があるが、それを言ひ出すと急激に難しくなるので、今はさういふものがあるといふ程度で置いておけばいい。

2.3.2.3 中古音の主母音

主母音とは韻母の中核にある要素で、また音節の中核ともなるものである。や

はりあまり使はれないのだが、韻腹とも呼ばれる。

これは西洋言語學的に言へば、二重母音や三重母音などを含む母音のうち最も聞こえ度の高い母音要素である。

中古音にある主母音は、隋拼表記で $a\ e\ \text{ə}\ i\ o\ u$ の6つである。ただし、 $-r-$ を介音あつかひしない場合はもっと増える。

・ a : $[a] \sim [a]$ あたり。他の主母音もさうだが、現代漢語の $\langle a \rangle$ が $\langle -an \rangle$ のときと $\langle -ang \rangle$ のときとで音が違ふやうに、中古音でも介音や韻尾によって音が變はる。とはいへ時代的、地域的な差異を鑑みると、あまり具體的に考へても仕方がないので、現代日本語の /ア/ あたりだと思つてゐれば十分だと思ふ。なほ、 ra は通常の a よりも前より (/エ/ より) になり、そのとき通常の a は後ろより (/オ/ より)。

・ e : $[e] \sim [e]$ あたり。現代日本語の /エ/ あたり。なほ、 re は通常の e よりも廣め (/ア/ より) になり、そのとき通常の e は狭め (/イ/ より)。

・ ə : $[\text{ə}]$ あたり。フランス語などに出てくる曖昧母音ではなく、正真正銘の中央母音。とはいへ介音や韻尾によってかなり變はる。/ア/ と /エ/ と /オ/ の中間だと思つてゐればいい。なほ、コンピュータ入力上の都合などで $\langle \text{ə} \rangle$ が使へない場合は、 $\langle w \rangle$ でもって代用するといった感じ。

・ i : $[i]$ あたり。常に介音要素 $-i-$ (つまり介音 $-i-$, $-y-$, $-ri-$, $-ry-$ のどれか) を伴ふ。表記上は主母音が省略され、ゼロ主母音あつかひになる。たとへば介音 $-i-$ と主母音 i が合はさると $\langle ii \rangle$ ではなく單に $\langle i \rangle$ になる。また、介音 $-y-$ (または $-ry-$) を伴ふと表記上の主母音は $\langle y \rangle$ になり、そのときの發音も $[y]$ あたりになる。このときの y を i とは別の主母音とみなすこともできるが、別にどちらでもいい。

・ o : $[o] \sim [o]$ あたり。 ro は通常の o より廣め。 a の異音としての o もいくつかあり、そのときはかなり /ア/ よりになる。

・ u : $[u]$ あたり。常に介音要素 $-u-$ (つまり介音 $-u-$, $-y-$, $-ru-$, $-ry-$ のどれか) を伴ふ。こちらは i とは違ひ、 $\langle uu \rangle$ と連續したときのみに介音が省略されて $\langle u \rangle$ と表記する。 ə の異音としての u もあり、そのときはかなり ə よりになる。

a に書いたやうに、それぞれの發音は目安程度に思つておくだけでとりあへず問題はない。むしろ表記に本質が現れてゐることも多い (いやまあ隋拼をさういふ

風に設計したので)。

なほ、主母音に伝統的な言ひかたは無い(はず)。

2.3.2.4 中古音の韻尾

韻母の最後にくる要素である。相變はらず、尾音とも呼ばれる。といふか、名前からも分かる通り、“介音、主母音、尾音”で、また“韻頭、韻腹、韻尾”でセットになってゐるはずなのだが、なぜか“介音、主母音、韻尾”でセットになってゐることが多い。なんで。

西洋言語學的に言へば、下降二重母音や三重母音の最後にくる(半)母音;もしくは音節の最後にくる子音、つまり末子音である。ここだけ西洋言語學と違って、子音的なものと母音的なものの両方を含んでゐるので、そこには注意したい。まあ半母音を接近子音とみなせば、たぶん全て子音あつかいできるんですが。

中古音にある韻尾は、隋拼表記で -i, -u, -m, -n, -ŋ, -p, -t, -k, そしてゼロの9つである。

・ -i と -u: 介音と主母音でおなじみのやつなので發音はもう説明いらないと思ふんだ私。表記に關しては、それぞれ同じ字の主母音、つまり -i なら ⟨i⟩, -u なら ⟨u⟩ に續いた場合に省略される。といつてもゼロ韻尾とみなしても特に問題はない。また、介音と違って -y や -r などが無いことに注意。

・ -m, -n, -ŋ, -p, -t, -k: それぞれほぼ IPA 通りに [m], [n], [ŋ], [p̚], [t̚], [k̚]。-p, -t, -k は現代廣東語や韓國語などのやうに内破音だったとされ、フランス語などの音節末閉鎖音とはちょっと違ふ。まあ實用上はどっちでもいいとおもふ。聲調の項で説明した通り、-m は -p と、-n は -t と、-ŋ は -k とそれぞれ音韻的に對應してゐる。なほ、⟨a⟩ と同様の事情で ⟨ŋ⟩ が使へない場合は ⟨v⟩ で代用することにしてゐる。ちょっと讀みにくいけれども ⟨ng⟩ は微妙に困るのでちょっと厳しい。まだ ⟨nh⟩ のがいいかも。まあ所詮は代用なので好きにどうぞ。

・ ゼロ: ゼロです。表記上は主母音で終はるもの(ただし主母音 i と u は -i と -u の略されたもの)。

なほ、傳統的には -p, -t, -k を纏めて“入聲韻尾”，-m, -n, -ŋ を纏めて“陽聲韻尾”，それ以外を“陰聲韻尾”，といふ(韻母として言へば“入聲韻、陽聲韻、陰聲韻”)。

入聲韻尾は名前こそ四聲の入聲と同じ(まあそれが由來だし)だが、こっちは

韻尾であつちが聲調といふ全く別のもので、中古音ではないが他の漢語方言で“入聲だけど入聲韻尾でなく、入聲韻尾だけど入聲でない。”といふこともあるので、混同しないやう注意したい。

また、-p を“唇内入聲韻尾”，-t を“舌内～”，-k を“喉内～”と謂ふ。ただ、對應する陽聲韻尾のはうは“唇内陽聲韻尾”などとは言はず“唇内鼻音韻尾”などと言ふ。なんで。

2.3.2.5 中古音の韻母（再）

以上に示した 8 つの介音のどれか、6 つの主母音のどれか、9 つの韻尾のどれかが合はさることで、韻母が形成されてゐる。

聲調の項で言及した聲調記號の件だが、これは原則として主母音の上に置かれる。具體的には：

- ・ 音節に a, e, ə, o がある場合：これらは主母音としてのみ現れる文字なので、自明にこの上に聲調記號が置かれる。
- ・ 音節に母音字が i, u, y しか無い場合：それらの字が 1 つしかなければその上。2 つ以上が組み合はさってゐるものは ui, yui, yu, yi, iu の 5 つがあるが、それぞれに上聲のエギユをつけると úi, yúi, yú, ýi, íu となる。yu 以外は“後ろから 2 番目”。

韻母の傳統的な標記としては、《廣韻》の韻目を利用して“冬韻”や“侯韻”などと表される。《廣韻》韻目は四聲によって分けられてゐるので、たとへば去聲で“冬韻”のときに“宋韻”とするなどとして分けることもあるが、なんにせよ四聲相配してゐるので平聲の韻目を使へば十分である（ただし一部の韻目は去聲にしないので、それらは去聲の韻目が使はれる）。

また、一部の韻目は、1 つの韻目に複数の介音ちがひの韻母が含まれてゐることがあり、それらを分けて“東韻一等”と“東韻三等”，“微韻開口”と“微韻合口”などとしないと韻母が特定されない。どの韻目がさうなつてゐるかなどは割とランダムである。とてもよくない。

2.3.3 中古音の聲母

中古音にはゼロ聲母をふくめて 37 種類の聲母が存在する。聲母は韻母や聲調と違って曖昧性が少なく、再構精度が高いので、逆にふんわりではなくちゃんと區

別する必要がある。数が多いので個別の説明は附録の表に回すが、全體として以下のやうな特徴がある。

- ・ 破裂音、破擦音の3對立: p [p], ph [pʰ], b [b] のやうに、現代漢語と日本語とを合はせたやうな、無聲無氣音、有氣音、有聲音の對立がある。現代漢語や韓國語などの語學でたまにある“有聲音で無氣音を代用する”は通用しない。特に破擦音の區別は私にもつらい。がんばらう。なほ、無聲無氣音、有氣音、有聲音それぞれの系列を傳統的には全清音、次清音、全濁音と言ふ。
- ・ “齒音”の3對立: 調音點が齒莖あたりにある破擦音と摩擦音を、傳統的に“齒音”と呼ぶのだが、これに具體的な調音點によって齒莖音(齒頭音)、そり舌音(齒上音)、齒莖硬口蓋音(正齒音)の3對立が存在する。これもつらい。努力。ちなみに現代日本語の漢字音では全てサ行かザ行になってゐるのだが、現代日本語に同音異義語がやたらと多い最大の要因の1つ、というか私見では最大の要因そのものである。ひどすぎる。
- ・ 介音による相補分布: 齒音と舌音(調音點が齒莖あたりにある破裂音)は、介音によって現れる子音が決まってゐる。そのため、隋拼ではその介音を含んだ部分が聲母として扱はれるので注意(例: 知 |trie は、<tr>が聲母であり、また <ri> が介音である)。

これをもって中古音の概説を終へるが、以上に示した漢語音韻學に音節の解釋は、中古音のみならず他の漢字音體系にもまゝ使へるものなので、現代日本語漢字音などで考へてみるのもいいかもしれない。特に現代標準漢語は注音符號がこれに基づいて作られてゐるので、その視點で眺めてみると面白いと思ふ。まゝ私は拼音のほうが好きだし、けっきょく ハングルがいちばん つよくて すごいんだよね。

ん? 反切? 知らない娘ですね……。

3 破音字について(追記)

漢語では1つの漢字に複数の漢字音が割り當てられてゐることがあり、これを“多音”といふ。これには、日本語でいふ吳音、漢音や、現代漢語諸方言の文白異讀、また漢字統合や同形衝突などによって生じたものなどもあるが、その中で特に中古音から存在した意義や詞類(品詞)などが異なる多音を“破音(または破讀)”と言ふ。まゝ多音と破音の區別はちょっと曖昧だが……。

破音はもともと上古音に存在した詞類變化などを起こす接頭辭、接尾辭などに

よる音韻變化の違いに由來するとみられてゐる。中古の時代に入って接辭としての形とともにその機能も失はれ、音と意味の違いとしての名残だけが残ったが、その數や使ひ分けは時代を経るごとに廢れ、統合されていった。

しかしながら、中古漢語では依然として多くの字が多音字、破音字であり、これを意識し把握しなければ正しい字音を使ふことができない。多くが去聲とそれ以外の組み合わせである（平上入聲の去聲化、文法的には名詞化や他動詞化など）のため、平仄などにも深く影響してしまふ。ちなみに《廣韻》では載ってゐる漢字のうちほぼ 25% が多音字である。

本書は特に破音の區別に注力してゐるため、（載ってゐる字については）これを判別するのにそこそ役立つはずである。たぶん。もっとも、破音も時代、地域、さらには話者の規範意識によって揺れ動きがあるため、常に本書（やその他の辭書）の通りに使ひわけられてゐるとは限らないことに注意したい。

また、（特に古い）韻文においては許容度が高かったかもしれず、普通は混同されないほど明らかに違ふ字音で詠まれてゐる場合もある。とはいへ、これが規範意識によるものか、なんらかの音韻的事情によるものかはよくわからないので、現代人が作詩する分には氣にしないでおかう。

附錄：韻母表

| 詩韻 | | | | 《廣韻》韻目 | | | | 傳統 | 隋拼 |
|----|----|----|----|--------|----|----|----|-----|-------|
| 平聲 | 上聲 | 去聲 | 入聲 | 平聲 | 上聲 | 去聲 | 入聲 | 韻母 | 韻母 |
| 東 | 董 | 送 | 屋 | 東 | 董 | 送 | 屋 | 東一 | -uŋ |
| | | | | | | | | 東三 | -yʊŋ |
| 冬 | | 宋 | 沃 | 冬 | | 宋 | 沃 | 冬 | -oŋ |
| | 腫 | | | 鍾 | 腫 | 用 | 燭 | 鍾 | -yoŋ |
| 江 | 講 | 絳 | 覺 | 江 | 講 | 絳 | 覺 | 江 | -roŋ |
| 支 | 紙 | 寘 | | 支 | 紙 | 寘 | | 支甲開 | -ie |
| | | | | | | | | 支甲合 | -ye |
| | | | | | | | | 支乙開 | -rie |
| | | | | | | | | 支乙合 | -rye |
| | | | | 脂 | 旨 | 至 | | 脂甲開 | -i |
| | | | | | | | | 脂甲合 | -yi |
| | | | | | | | | 脂乙開 | -ri |
| | | | | | | | | 脂乙合 | -ryi |
| | | | | 之 | 止 | 志 | | 之 | -iə |
| 微 | 尾 | 未 | | 微 | 尾 | 未 | | 微開 | -iəi |
| | | | | | | | | 微合 | -yui |
| 魚 | 語 | 御 | | 魚 | 語 | 御 | | 魚 | -io |
| 虞 | 麌 | 遇 | | 虞 | 麌 | 遇 | | 虞 | -yo |
| | | | | 模 | 姥 | 暮 | | 模 | -o |
| 齊 | 薺 | 霽 | | 齊 | 薺 | 霽 | | 齊開 | -ei |
| | | | | | | | | 齊合 | -uei |
| | | | | | | 祭 | | 祭甲開 | -iei |
| | | | | | | | | 祭乙開 | -riei |
| | | | | | | | | 祭乙合 | -ryei |
| | | 泰 | | | | 泰 | | 泰開 | -ai |
| | | | | | | | | 泰合 | -uai |
| 佳 | 蟹 | 卦 | | 佳 | 蟹 | 卦 | | 佳開 | -re |
| | | | | | | | | 佳合 | -rue |
| | | | | 皆 | 駭 | 怪 | | 皆開 | -rei |
| | | | | | | | | 皆合 | -ruei |
| | | | | | | 夬 | | 夬開 | -rai |
| | | | | | | | | 夬合 | -ruai |
| 灰 | 賄 | 隊 | | 灰 | 賄 | 隊 | | 灰 | -ui |
| | | | | 哈 | 海 | 代 | | 哈 | -əi |
| | | | | | | 廢 | | 廢開 | -iai |
| | | | | | | | | 廢合 | -yoi |

| 詩韻 | | | | 《廣韻》韻目 | | | | 傳統 | 隋拼 |
|----|----|----|----|--------|----|----|----|-----|-------|
| 平聲 | 上聲 | 去聲 | 入聲 | 平聲 | 上聲 | 去聲 | 入聲 | 韻母 | 韻母 |
| 眞 | 軫 | 震 | 質 | 眞 | 軫 | 震 | 質 | 眞甲開 | -in |
| | | | | | | | | 眞乙開 | -rin |
| | | | | | | | | 眞乙合 | -ryn |
| | | | | 諄 | 準 | 稕 | 術 | 諄 | -yn |
| 文 | 吻 | 問 | 物 | 臻 | | | 櫛 | 臻 | -rin |
| | | | | 文 | 吻 | 問 | 物 | 文 | -yun |
| | | | | 欣 | 隱 | 焮 | 迄 | 欣 | -iæn |
| | | | | | | | | | |
| 元 | 阮 | 願 | 月 | 元 | 阮 | 願 | 月 | 元開 | -ian |
| | | | | | | | | 元合 | -yon |
| | | | | 魂 | 混 | 慁 | 沒 | 魂 | -un |
| | | | | 痕 | 很 | 恨 | | 痕 | -æn |
| 寒 | 旱 | 翰 | 曷 | 寒 | 旱 | 翰 | 曷 | 寒 | -an |
| | | | | 桓 | 緩 | 換 | 末 | 桓 | -uan |
| 刪 | 潸 | 諫 | 黠 | 刪 | 潸 | 諫 | 黠 | 刪開 | -ran |
| | | | | | | | | 刪合 | -ruan |
| | | | | 山 | 產 | 櫛 | 鎋 | 山開 | -ren |
| | | | | | | | | 山合 | -ruen |
| 先 | 銑 | 霰 | 屑 | 先 | 銑 | 霰 | 屑 | 先開 | -en |
| | | | | | | | | 先合 | -uen |
| | | | | 仙 | 獮 | 線 | 薛 | 仙甲開 | -ien |
| | | | | | | | | 仙甲合 | -yen |
| 蕭 | 篠 | 嘯 | | 蕭 | 篠 | 嘯 | | 蕭 | -eu |
| | | | | 宵 | 小 | 笑 | | 宵甲 | -ieu |
| | | | | | | | | 宵乙 | -rieu |
| | | | | 肴 | 巧 | 效 | | 肴 | -rau |
| 肴 | 皓 | 號 | | 豪 | 皓 | 號 | | 豪 | -au |
| | | | | 歌 | 哿 | 箇 | | 歌 | -a |
| | | | | 戈 | 果 | 過 | | 戈一合 | -ua |
| | | | | | | | | 戈三開 | -ia |
| 麻 | 馬 | 禡 | | | | | | 戈三合 | -ya |
| | | | | 麻 | 馬 | 禡 | | 麻二開 | -ra |
| | | | | | | | | 麻二合 | -rua |
| | | | | | | | | 麻三開 | -ia |
| 陽 | 養 | 漾 | 藥 | 陽 | 養 | 漾 | 藥 | 陽開 | -ian |
| | | | | | | | | 陽合 | -yan |
| | | | | 唐 | 蕩 | 宕 | 鐸 | 唐開 | -aŋ |
| | | | | | | | | 唐合 | -uaŋ |

| 詩韻 | | | | 《廣韻》韻目 | | | | 傳統 | 隋拼 |
|----|----|----|----|--------|----|----|----|-----|-------|
| 平聲 | 上聲 | 去聲 | 入聲 | 平聲 | 上聲 | 去聲 | 入聲 | 韻母 | 韻母 |
| 庚 | 梗 | 敬 | 陌 | 庚 | 梗 | 映 | 陌 | 庚二開 | -raŋ |
| | | | | | | | | 庚二合 | -ruaŋ |
| | | | | | | | | 庚三開 | -rieŋ |
| | | | | | | | | 庚三合 | -ryeŋ |
| | | | | 耕 | 耿 | 諍 | 麥 | 耕開 | -reŋ |
| | | | | | | | | 耕合 | -ruen |
| 青 | 迥 | 徑 | 錫 | 青 | 迥 | 徑 | 錫 | 青開 | -eŋ |
| | | | | | | | | 青合 | -uen |
| | | | | 蒸 | 拯 | 證 | 職 | 蒸開 | -iəŋ |
| | | | | | | | | 蒸合 | -ryəŋ |
| | | | | 登 | 等 | 嶝 | 德 | 登開 | -əŋ |
| | | | | | | | | 登合 | -uəŋ |
| 尤 | 有 | 宥 | | 尤 | 有 | 宥 | | 尤 | -yu |
| | | | | 侯 | 厚 | 候 | | 侯 | -u |
| | | | | 幽 | 黝 | 幼 | | 幽甲 | -iu |
| | | | | | | | | 幽乙 | -riu |
| 侵 | 寢 | 沁 | 緝 | 侵 | 寢 | 沁 | 緝 | 侵甲 | -im |
| | | | | | | | | 侵乙 | -rim |
| 覃 | 感 | 勘 | 合 | 覃 | 感 | 勘 | 合 | 覃 | -əm |
| | | | | 談 | 敢 | 闕 | 盍 | 談 | -am |
| 鹽 | 琰 | 豔 | 葉 | 鹽 | 琰 | 豔 | 葉 | 鹽甲 | -iem |
| | | | | | | | | 鹽乙 | -riem |
| | | | | 添 | 忝 | 忝 | 帖 | 添 | -em |
| | | | | 嚴 | 儼 | 釅 | 業 | 嚴 | -iam |
| 咸 | 謙 | 陷 | 洽 | 凡 | 梵 | 范 | 乏 | 凡 | -yom |
| | | | | 咸 | 謙 | 陷 | 洽 | 咸 | -rem |
| | | | | 銜 | 檻 | 鑑 | 狎 | 銜 | -ram |
| | | | | | | | | | |

注1: 詩韻、《廣韻》韻目の字は《漢辭海》に記載されてゐるものとした。ただし、所謂“舊字體”に改めた。

注2: 隋拼で上聲、去聲の聲調記號は、太字にした字母の上につける。

注3: 隋拼表記が全く同じになってゐるところは、聲母に依存するため衝突することはない。安心。

附録： 聲母表

| | 全清 | | | 次清 | | | 全濁 | | | 次濁 | | |
|----|----|------|------|----|------|--------------------|----|------|------|----|-----|-----|
| | 傳統 | 隋拼 | IPA | 傳統 | 隋拼 | IPA | 傳統 | 隋拼 | IPA | 傳統 | 隋拼 | IPA |
| 唇音 | 幫 | p- | [p] | 滂 | ph- | [p ^h] | 並 | b- | [b] | 明 | m- | [m] |
| 舌音 | 端 | t- | [t] | 透 | th- | [t ^h] | 定 | d- | [d] | 泥 | n- | [n] |
| | 知 | tr- | [t] | 徹 | thr- | [t ^h] | 澄 | dr- | [d] | 娘 | nr- | [ŋ] |
| 齒音 | | | | | | | | | | 來 | l- | [l] |
| | 精 | c- | [ts] | 清 | ch- | [ts ^h] | 從 | dz- | [dz] | | | |
| | 莊 | cr- | [tʃ] | 初 | chr- | [tʃ ^h] | 崇 | dzr- | [dʒ] | | | |
| | 章 | tb- | [tʃ] | 昌 | thb- | [tʃ ^h] | 常 | db- | [dʒ] | 日 | nb- | [ɳ] |
| | 心 | s- | [s] | | | | 邪 | z- | [z] | | | |
| | 生 | sr- | [ʃ] | | | | 俟 | zr- | [z] | | | |
| | 書 | shb- | [ʃ] | | | | 船 | zhb- | [ʃ] | 以 | jb- | [j] |
| 牙音 | 見 | k- | [k] | 溪 | kh- | [k ^h] | 群 | g- | [g] | 疑 | ŋ- | [ŋ] |
| 喉音 | 影 | q- | [ʔ] | 曉 | qh- | [h] | 匣 | x- | [f] | 云 | x- | [f] |

注 1： 実際には、以母は喉音に、曉母は全清音に分類される。

注 2： 云母の隋拼表記は、〈x-〉のうち、後に介音要素 -i- が続くもの。なほ、匣母と云母は、（前期）中古音においては同一の聲母であるが、後期中古音において云母が以母に接近するため、伝統的に分けられてゐる。

注 3： 隋拼の〈b〉は、聲母の整理に使ふ特殊字母で、介音 -i- または -y- が続くことを指す。実際には表記されない。また、云母と違って -ri- と -ry- はこれに含まない。

注 4： 聲母と韻母を組み合わせるとき、r が 2 つ続く場合はこれを 1 つにする。

注 5： 例外音などで舌音、齒音において、聲母の介音と韻母のが合はなるときは、〈〉を使って聲母と韻母とを分ける。例： 地 |〈d-〉+〈-î〉>〈d'î〉（〈dî〉は〈db-〉+〈-î〉）

注 6： 唇音は、開合に關して特殊なルールが存在するが、面倒なので省略する。

注 7： [ɳ] は、正則 IPA では [ɳ̌]。

四角號碼索引

四角號碼のヒント

- ・ 左上、右上、左下、右下の順で、そこにある“要素”を数字にする。
- ・ 最も左（右）のが優先だが、ある要素全体がその上（下）にあればそれを優先。
- ・ 小さい五桁目は右下要素のすぐ上にある要素。ただし揺れが大きい。悪い文明。
- ・ その要素が前の桁ですでに使はれてゐたら 0 にする。
- ・ [口] 60XX_x や [門] 77XX_x などの後ろ三桁は構への中のを採る。
- ・ 基本的に 1、2、3 以外が優先。

| | | | |
|---|---|---|------------------------------|
| 0 | 頭 | 一 | 点と横線，またすでに使った要素。ただし [口] は 3。 |
| 1 | 横 | 一 | 左から右にいくやつ。右拂ひは 3。 |
| 2 | 垂 | 丨 | 1 ではない縦と左拂ひ。 |
| 3 | 点 | 丶 | 点と右拂ひ。[口] の左も含む。なんで。 |
| 4 | 叉 | 十 | 別の一畫と交はってるやつ。二角以上となら 5。 |
| 5 | 插 | 扌 | 別の二畫以上と交はってるやつ。 |
| 6 | 方 | 口 | 口っぽいやつ。四角形以外は 7。同じ“口”なら以降 0。 |
| 7 | 角 | ㄣ | 角になってるやつ。 |
| 8 | 八 | 八 | 八の字っぽいやつ。[人] みたいに接しててもいい。 |
| 9 | 小 | 小 | 小の字っぽいやつ。8 の三つ版。 |

普通の字書は一文字に一つの號碼だが，ここでは把握してゐる揺れを全て載せた。また四角號碼の性質上，字の左側部品（偏）が分散されてしまふのを憂慮し，三回以上でてくる左側部品をまた別に載せた。

| | | | | |
|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 0XXX _x | 0026 ₅ 唐 024:4 | 0121 ₁ 龍 019:1 | 0X6X _x ([言]) | 1010 ₁ 正 054:4 |
| 0010 ₈ 立 053:4 | 0026 ₇ 唐 024:4 | 0121 ₁ 龍 019:1 | 0063 ₂ 讓 023:3 | 1010 ₂ 五 038:3 |
| 0021 ₁ 靡 046:1 | 0033 ₁ 忘 044:4 | 0212 ₇ 端 054:2 | 0063 ₂ 讓 023:3 | 1010 ₃ 玉 012:1 |
| 0021 ₂ 競 060:4 | 0040 ₀ 文 021:3 | 0442 ₇ 効 042:2 | 0464 ₁ 詩 050:1 | 1010 ₄ 王 032:4 |
| 0021 ₆ 競 060:4 | 0040 ₃ 率 032:1 | 0464 ₁ 詩 050:1 | 0468 ₆ 讚 050:2a | 1010 ₇ 五 038:3 |
| 0022 ₇ 育 029:2 | 0040 ₆ 章 028:4 | 0468 ₆ 讚 050:2a | 0568 ₆ 讚 050:2a | 1016 ₄ 露 010:1 |
| 0022 ₇ 商 026:3b | 0063 ₂ 讓 023:3 | 0568 ₆ 讚 050:2a | 0762 ₀ 調 008:3 | 1021 ₁ 元 001:3b |
| 0022 ₇ 帝 019:4 | 0063 ₂ 讓 023:3 | 0612 ₇ 竭 063:3 | 0968 ₉ 談 045:2 | 1022 ₇ 雨 009:4 |
| 0022 ₇ 方 036:4 | 0071 ₆ 竜 019:1 | 0762 ₀ 調 008:3 | 1XXX _x | 1022 ₇ 万 036:3 |
| 0024 ₇ 慶 058:4 | 0073 ₂ 衣 022:3 | 0844 ₀ 效 042:2 | 1000 ₀ 一 031:3 | 1024 ₇ 覆 047:4a |
| 0024 ₇ 夜 014:3 | 0073 ₂ 玄 001:3a | 0968 ₉ 談 045:2 | | 1033 ₁ 惡 057:3 |

| | | | | |
|----------------------------|--------------------------------|----------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 1033 ₁ 惡 057:3 | 1771 ₇ 己 046:3 | 2128 ₄ 虞 024:2 | 2600 ₀ 白 034:1 | 2523 ₀ 体 031:4 |
| 1040 ₉ 平 028:3 | 1812 ₂ 珍 015:2 | 2140 ₇ 与 062:3 | 2610 ₄ 皇 020:4 | 2524 ₃ 傳 055:3 |
| 1043 ₀ 天 001:1 | 1814 ₀ 敢 040:2 | 2172 ₇ 師 019:2 | 2624 ₁ 得 044:1 | 2821 ₁ 作 052:3 |
| 1062 ₀ 可 047:3 | 1814 ₀ 致 009:3 | 2180 ₆ 貞 041:3a | 2671 ₁ 崐 012:3a | 2822 ₇ 傷 040:4 |
| 1073 ₁ 雲 009:1 | 1844 ₀ 敢 040:2 | 2210 ₈ 豈 040:1 | 2671 ₂ 崐 012:3a | 2X2X_x (𠂔𠂔𠂔𠂔) |
| 1073 ₂ 雲 009:1 | 1874 ₀ 改 043:4 | 2211 ₀ 此 037:2 | 2702 ₇ 婦 032:3 | 2021 ₄ 往 005:4 |
| 1080 ₄ 天 001:1 | 1X1X_x (𠂔𠂔王𠂔) | 2220 ₀ 制 021:2a | 2712 ₇ 歸 032:3 | 2122 ₁ 行 051:2 |
| 1096 ₁ 霜 010:4 | 1010 ₃ 玉 012:1 | 2221 ₂ 能 044:2 | 2713 ₂ 黎 029:3 | 2423 ₁ 德 053:1 |
| 1096 ₃ 霜 010:4 | 1010 ₄ 王 032:4 | 2222 ₇ 崗 012:4 | 2724 ₇ 殷 026:3a | 2423 ₆ 德 053:1 |
| 1111 ₁ 非 059:3 | 1519 ₀ 珠 014:1 | 2244 ₇ 艸 035:3 | 2730 ₃ 冬 006:3 | 2424 ₇ 彼 045:3 |
| 1121 ₂ 麗 011:3 | 1719 ₂ 玼 015:2 | 2271 ₁ 崐 012:3a | 2732 ₇ 鳥 020:1 | 2520 ₇ 律 008:1 |
| 1123 ₂ 張 004:4 | 1812 ₂ 珍 015:2 | 2271 ₂ 崐 012:3a | 2740 ₀ 身 037:3 | 2521 ₁ 徃 005:4 |
| 1133 ₁ 悲 049:2 | | 2273 ₂ 製 021:2b | 2760 ₀ 名 053:3 | 2624 ₁ 得 044:1 |
| 1220 ₀ 列 004:3 | 2XXX_x | 2277 ₂ 出 012:2 | 2760 ₂ 名 053:3 | 2824 ₇ 復 047:4b |
| 1223 ₀ 水 011:4 | 2010 ₄ 重 016:2 | 2294 ₇ 稱 014:2 | 2774 ₀ 収 006:2 | 2X9X_x (𠂔𠂔禾𠂔) |
| 1224 ₇ 發 026:2 | 2010 ₄ 垂 028:1 | 2295 ₇ 稱 014:2 | 2790 ₉ 黎 029:3 | 2294 ₇ 稱 014:2 |
| 1233 ₀ 烈 041:4b | 2010 ₅ 重 016:2 | 2299 ₃ 糸 049:3 | 2793 ₂ 緣 058:2 | 2295 ₇ 稱 014:2 |
| 1241 ₅ 癸 026:2 | 2010 ₅ 垂 028:1 | 2299 ₃ 絲 049:3 | 2793 ₂ 緣 058:2 | 2598 ₈ 積 057:4 |
| 1242 ₂ 形 054:1 | 2021 ₄ 往 005:4 | 2323 ₄ 伏 030:2 | 2799 ₂ 称 014:2 | 2799 ₂ 称 014:2 |
| 1290 ₀ 水 011:4 | 2021 ₈ 位 023:2 | 2325 ₀ 伐 025:3 | 2821 ₁ 作 052:3 | 2998 ₀ 秋 006:1 |
| 1413 ₁ 聽 056:4 | 2022 ₇ 爲 010:3 | 2328 ₄ 伏 030:2 | 2822 ₇ 傷 040:4 | 2X9X_x (𠂔𠂔糸𠂔) |
| 1413 ₆ 聽 056:4 | 2024 ₇ 愛 029:1 | 2365 ₀ 鹹 017:2 | 2824 ₇ 復 047:4b | 2091 ₄ 維 051:3 |
| 1519 ₀ 珠 014:1 | 2026 ₁ 信 047:1 | 2421 ₀ 化 035:1 | 2874 ₀ 收 006:2 | 2091 ₅ 維 051:3 |
| 1540 ₀ 建 053:2 | 2040 ₇ 愛 029:1 | 2423 ₁ 德 053:1 | 2935 ₉ 鱗 018:1 | 2299 ₃ 糸 049:3 |
| 1610 ₄ 聖 052:4 | 2091 ₄ 維 051:3 | 2423 ₆ 德 053:1 | 2998 ₀ 秋 006:1 | 2299 ₃ 絲 049:3 |
| 1710 ₂ 盈 003:3 | 2091 ₅ 維 051:3 | 2424 ₇ 彼 045:3 | 2X2X_x (𠂔𠂔𠂔𠂔) | 2496 ₁ 結 010:2 |
| 1710 ₇ 盈 003:3 | 2111 ₀ 此 037:2 | 2480 ₆ 贊 050:2b | 2021 ₈ 位 023:2 | 2793 ₂ 緣 058:2 |
| 1712 ₀ 羽 018:3 | 2112 ₇ 与 062:3 | 2496 ₁ 結 010:2 | 2026 ₁ 信 047:1 | 2793 ₂ 緣 058:2 |
| 1719 ₂ 玼 015:2 | 2121 ₁ 能 044:2 | 2510 ₀ 生 011:2 | 2123 ₁ 伝 055:3 | |
| 1722 ₇ 乃 022:1 | 2121 ₂ 虚 056:1 | 2520 ₆ 使 047:2 | 2323 ₄ 伏 030:2 | |
| 1724 ₇ 及 036:2 | 2121 ₇ 虚 056:1 | 2520 ₇ 律 008:1 | 2325 ₀ 伐 025:3 | 3XXX_x |
| 1752 ₇ 弔 025:1 | 2122 ₁ 行 051:2 | 2521 ₀ 徃 005:4 | 2328 ₄ 伏 030:2 | 3010 ₁ 空 055:1 |
| 1760 ₂ 習 056:3 | 2123 ₁ 伝 055:3 | 2523 ₀ 体 031:4 | 2421 ₀ 化 035:1 | 3010 ₂ 空 055:1 |
| 1760 ₂ 召 008:2b | 2125 ₃ 歲 007:4 | 2524 ₃ 傳 055:3 | 2520 ₆ 使 047:2 | 3010 ₃ 宝 059:4 |
| 1760 ₇ 君 061:4 | 2128 ₁ 虞 024:2 | 2598 ₆ 積 057:4 | | 3026 ₁ 宿 004:2 |

| | | | | |
|----------------------------|-----------------------------------|----------------------------|-----------------------------------|----------------------------|
| 3026 ₂ 宿 004:2 | 3918 ₉ 淡 017:4 | 4080 ₀ 大 038:2 | 4742 ₀ 朝 027:2 | 6020 ₇ 号 013:2 |
| 3030 ₃ 寒 005:1 | 3X1X_x (𠂔 𠂔 𠂔 𠂔) | 4081 ₅ 難 048:3 | 4752 ₀ 鞠 039:3 | 6021 ₀ 四 038:1 |
| 3040 ₁ 宇 002:1 | 3112 ₀ 河 017:3 | 4090 ₀ 木 035:4 | 4864 ₀ 敬 062:4 | 6021 ₂ 四 038:1 |
| 3040 ₇ 字 021:4 | 3116 ₁ 潛 018:2 | 4090 ₁ 奈 015:4 | 5XXX_x | 6022 ₇ 吊 025:1 |
| 3060 ₂ 宙 002:2 | 3416 ₁ 潛 018:2 | 4090 ₁ 奈 015:4 | 5000 ₇ 事 061:3 | 6023 ₂ 晨 004:1 |
| 3060 ₅ 宙 002:2 | 3418 ₁ 洪 002:3 | 4090 ₈ 來 005:2 | 5001 ₄ 推 023:1 | 6028 ₁ 昃 003:4 |
| 3073 ₂ 良 042:4 | 3512 ₇ 清 041:3b | 4108 ₆ 頰 036:1b | 5001 ₅ 推 023:1 | 6042 ₇ 男 042:1 |
| 3077 ₇ 官 020:2 | 3516 ₁ 潛 018:2 | 4108 ₆ 頰 036:1b | 5010 ₂ 盡 064:3 | 6043 ₀ 因 057:2 |
| 3080 ₆ 賓 032:2 | 3516 ₃ 潛 018:2 | 4188 ₆ 頰 036:1b | 5010 ₇ 盡 064:3 | 6060 ₀ 呂 008:2a |
| 3080 ₆ 寶 059:4 | 3612 ₇ 湯 026:4 | 4221 ₀ 剋 052:1a | 5033 ₆ 忠 064:1 | 6060 ₂ 呂 008:2a |
| 3080 ₆ 寶 059:4 | 3719 ₃ 潔 041:4a | 4346 ₀ 始 021:1 | 5073 ₂ 表 054:3 | 6060 ₄ 暑 005:3 |
| 3112 ₀ 河 017:3 | 3815 ₇ 海 017:1 | 4410 ₂ 蓋 037:1 | 5090 ₀ 來 005:2 | 6071 ₁ 昆 012:3b |
| 3116 ₁ 潛 018:2 | 3918 ₉ 淡 017:4 | 4410 ₆ 薑 016:4 | 5198 ₆ 賴 036:1a | 6071 ₂ 昆 012:3b |
| 3126 ₆ 福 058:1 | 3X30_x (𠂔 𠂔 𠂔 𠂔) | 4410 ₇ 蓋 037:1 | 5320 ₀ 成 007:3 | 6080 ₁ 是 060:3 |
| 3130 ₂ 邇 031:2 | 3130 ₂ 邇 031:2 | 4411 ₂ 地 001:2 | 5340 ₀ 戎 030:3 | 6080 ₄ 因 057:2 |
| 3224 ₈ 敵 062:2 | 3730 ₂ 過 043:2 | 4421 ₁ 荒 002:4 | 5408 ₁ 拱 028:2 | 6090 ₄ 果 015:1 |
| 3300 ₀ 必 043:3 | 3730 ₄ 遐 031:1 | 4421 ₂ 荒 002:4 | 5580 ₆ 贊 050:2b | 6090 ₆ 景 051:1 |
| 3300 ₄ 必 043:3 | 3830 ₆ 道 027:4 | 4421 ₄ 菓 015:1 | 5790 ₃ 絜 041:4a | 6121 ₁ 號 013:2 |
| 3402 ₇ 為 010:3 | 4XXX_x | 4422 ₇ 萬 036:3 | 5798 ₆ 賴 036:1a | 6121 ₇ 號 013:2 |
| 3416 ₁ 潛 018:2 | 4002 ₇ 力 063:4 | 4422 ₈ 芥 016:3 | 5X0X_x (𠂔 𠂔 𠂔 𠂔) | 6280 ₀ 則 064:2 |
| 3418 ₁ 洪 002:3 | 4003 ₀ 大 038:2 | 4425 ₃ 藏 006:4 | 5001 ₄ 推 023:1 | 6624 ₈ 嚴 062:2 |
| 3424 ₇ 被 035:2 | 4010 ₈ 壹 031:3 | 4425 ₃ 藏 006:4 | 5001 ₅ 推 023:1 | 6666 ₃ 器 048:1 |
| 3432 ₇ 為 010:3 | 4020 ₀ 才 042:3 | 4433 ₈ 恭 039:1 | 5408 ₁ 拱 028:2 | 6666 ₈ 器 048:1 |
| 3490 ₄ 染 049:4 | 4021 ₂ 克 052:1b | 4433 ₈ 慕 041:2 | 6XXX_x | 7XXX_x |
| 3512 ₇ 清 041:3b | 4021 ₄ 在 033:3 | 4440 ₆ 草 035:3 | 6002 ₇ 号 013:2 | 7010 ₃ 璧 059:2 |
| 3516 ₁ 潛 018:2 | 4021 ₆ 克 052:1b | 4440 ₇ 孝 063:1 | 6010 ₀ 日 003:1 | 7171 ₂ 臣 030:1 |
| 3516 ₃ 潛 018:2 | 4022 ₇ 有 024:1 | 4442 ₇ 萬 036:3 | 6010 ₀ 日 062:1 | 7171 ₇ 巨 013:3 |
| 3612 ₇ 湯 026:4 | 4027 ₇ 声 055:4 | 4443 ₀ 莫 044:3 | 6010 ₃ 国 023:4 | 7171 ₇ 臣 030:1 |
| 3719 ₃ 潔 041:4a | 4030 ₀ 寸 060:1 | 4480 ₄ 莫 044:3 | 6010 ₄ 墨 049:1 | 7173 ₂ 長 046:4 |
| 3722 ₇ 禍 057:1 | 4040 ₀ 女 041:1 | 4480 ₆ 黃 001:4 | 6010 ₄ 量 048:4 | 7240 ₀ 髮 037:4 |
| 3730 ₂ 過 043:2 | 4040 ₇ 李 015:3 | 4480 ₆ 黃 001:4 | 6010 ₅ 量 048:4 | 7240 ₇ 髮 037:4 |
| 3730 ₄ 遐 031:1 | 4051 ₄ 難 048:3 | 4490 ₀ 樹 033:4a | 6011 ₁ 罪 025:4 | 7244 ₇ 髮 037:4 |
| 3780 ₆ 資 061:1 | 4071 ₂ 𡵓 031:3 | 4490 ₄ 菜 016:1 | 6015 ₃ 國 023:4 | 7521 ₈ 體 031:4 |
| 3815 ₇ 海 017:1 | | 4612 ₇ 場 034:4 | | |
| 3830 ₆ 道 027:4 | | 4740 ₁ 聲 055:4 | | |

- 7622₇ 陽 008:4 7724₇ 服 022:2 **8X4X_x** (𠄎矢○)
- 7710₄ 閏 007:1 7922₇ 騰 009:2 8141₈ 短 045:4
- 7714₇ 毀 040:3 **8XXX_x** 8181₈ 短 045:4
- 7721₀ 鳳 033:2 8000₀ 人 020:3 8640₀ 知 043:1
- 7722₀ 岡 012:4 8010₂ 盖 037:1 8680₀ 知 043:1
- 7722₀ 月 003:2 8010₇ 盖 037:1 **9XXX_x**
- 7722₀ 周 026:1 8010₉ 金 011:1 9001₄ 惟 039:2
- 7722₀ 陶 024:3 8021₁ 羌 030:4 9001₅ 惟 039:2
- 7722₀ 罔 045:1 8033₁ 羔 050:3 9010₄ 堂 056:2
- 7724₇ 服 022:2 8033₂ 念 052:2 9017₇ 当 063:2
- 7730₃ 尽 064:3 8040₀ 父 061:2 9021₁ 光 014:4
- 7732₀ 駒 034:2 8040₄ 姜 016:4 9021₂ 光 014:4
- 7748₂ 闕 013:4 8050₁ 羊 050:4 9022₇ 常 038:4
- 7760₁ 問 027:3 8051₂ 羌 030:4 9024₈ 蔽 062:2
- 7760₇ 問 027:3 8060₁ 首 029:4 9060₆ 當 063:2
- 7774₇ 民 025:2 8060₁ 善 058:3 9073₂ 裳 022:4
- 7777₂ 岡 012:4 8060₂ 首 029:4 9080₀ 火 019:3
- 7780₁ 與 062:3 8060₅ 善 058:3 9404₁ 恃 046:2
- 7780₆ 賢 051:4 8060₈ 谷 055:2 **9X0X_x** (𠄎𠄎○)
- 7780₇ 尺 059:1 8062₇ 命 064:4 9001₄ 惟 039:2
- 7823₁ 陰 060:2 8073₂ 食 034:3 9001₅ 惟 039:2
- 7823₁ 陰 060:2 8073₂ 養 039:4 9404₁ 恃 046:2
- 7823₂ 陰 060:2 8090₄ 余 007:2
- 7823₂ 陰 060:2 8141₈ 短 045:4
- 7922₇ 騰 009:2 8181₈ 短 045:4
- 7X2X_x** (𠄎𠄎○) 8250₀ 劍 013:1
- 7622₇ 陽 008:4 8280₀ 劍 013:1
- 7722₀ 陶 024:3 8640₀ 知 043:1
- 7823₁ 陰 060:2 8680₀ 知 043:1
- 7823₁ 陰 060:2 8752₀ 翔 018:4
- 7823₂ 陰 060:2 8768₂ 欲 048:2
- 7823₂ 陰 060:2 8810₄ 坐 027:1
- 7X2X_x** (𠄎月○) 8822₀ 竹 033:4b
- 7722₀ 月 003:2 8879₄ 餘 007:2

参考文献

字體は問答無用に全て所謂“舊字體”へ、假名遣ひは歴史的假名遣ひへ改めた。

書籍、論文など

Baxter, William H. & Sagart, Laurent (2014) *Old Chinese: A New Reconstruction*, Oxford University Press.

平田 眞一郎 (2005) 《〈悉曇藏〉所傳の四家の聲調について》(中國文學研究 31), 早稲田大學中國文學會。

平山 久雄 (1967) 《中古漢語の音韻》(中國文化叢書 1: 言語), 大修館。

大田 齋 (2013) 《韻書と等韻圖 I》(神戸市外国語大學研究叢書 52), 神戸市外国語大學外國學研究所。

大田 齋 (2016) 《韻書と等韻圖 II (完)》(神戸市外国語大學外國語研究 92), 神戸市外国語大學外國學研究所。

大島 正二 (2009) 《唐代の人は漢詩をどう詠んだか: 中國音韻學への誘ひ》, 巖波書店。

藤田 拓海 (2018) 《陸法言〈切韻〉研究》(https://nishogakusha.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=2623&file_id=20&file_no=2)。

野村 茂夫 (2005) 《千字文を讀み解く》, 大修館。

加藤 常賢 (1987) 《書經・上》(新釋漢文大系 25) 第 5 版, 明治書院。

木田 章義、小川 環樹 (1997) 《千字文》, 巖波書店。

日本國文化廳 (2010) 《常用漢字表》(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanji_hyo_20101130.pdf)。

Schuessler, Axel (2009) *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese: A Companion to Grammata Serica Recensa*, University of Hawaii Press.

小出 敦 (2007) 《日本漢字音、中國中古音對照表》(京都産業大學論集人文科學系列 37), 京都産業大學。

孫 玉文 (2007) 《漢語變調構詞研究》增訂本, 商務印書館。

矢澤 秀昭 (2014) 《多音字について》(敬愛大學研究論集 85), 敬愛大學經濟學會。

水谷 誠 (1982) 《陶淵明詩における破音字、兩收字の押韻について》(中國文學研究 8), 早稲田大學中國文學會。

中村 雅之 (2005) 《音韻學入門: 中古音篇》(<http://chinese-phonology.com/pdf/oningaku.pdf>)。

王 鳴盛 (2009) 《尚書後案》(儒藏・精華篇 18), 北京大學出版社。

遠藤 光暁 (1989) 《切韻の韻序について》(藝文研究 54), 慶應義塾大學藝文學會。

辭書

白水社 (2002) 《白水社中國語辭典》。

三省堂 (2011) 《全譯漢辭海》第 4 版。

小學館 (2005) 《精選版日本國語大辭典》。

小學館 (2016) 《中日辭典》第 3 版。

商務印書館 (2015) 《辭源》第 3 版。

東方書店 (2004) 《東方中國語辭典》。

網上データベース (閲覧は 2019 年中)

BYVoid 《韻典網: 廣韻》(<http://ytenx.org/kyonh/>)。

池田 證壽 《篆隸萬象名義データベース》(<https://github.com/shikedai/HDIC/KTB.txt>)。

鈴木 慎吾 《篇韻データベース》(<http://suzukish.s252.xrea.com/>)。

Unicode *UniHan Database Lookup* (<https://unicode.org/charts/unihan.html>)。

ひと

hsjoihs (Twitter: @hsjoihs).

《千字文音義 C96 體驗版》

(現代日本表記: 『千字文音義 C96 体験版』)

發行日: 2019 年 08 月 11 日

發行: 重ひも理論

著: Mag462 (Twitter ID: @Magnezone462)

聯絡先: email: qhandziwpyoitw@gmail.com

表紙作成: ぼる (Twitter ID: @PoL8139)

印刷: (株) ポプルス